



中学部・Aさんの弁論から ～当事者の思いが社会を変えるきっかけや力に～

少し前のことになりますが、7月に開催された「桐生市弁論大会」に中3・Aさんが出場しました。「車椅子の私と目が合ったとき、あなたは何を思いますか？」という演題の発表を通して、日頃から感じている車椅子当事者としての思いを、多くの聴衆に伝えることができました。

発表では、店舗で手の届かない高さにある商品や、スロープの角度が急すぎて渡るのが危険な横断歩道、手すりになかったり位置やサイズが合わなかったりするトイレ、電車やバスでの移動の苦労等、車椅子生活における具体的な大変さを伝え、聴衆に深い気付きを与えました。



最後に、「私の『不便』を知ることは、決して私一人を助けることではありません。お年寄りやベビーカーを押す人、いつか怪我をするかもしれない誰かのために、優しい社会をつくることに繋がっています。誰もが自由に過ごせる社会をつくることできると信じています」と、彼女の力強い言葉で締めくくられました。

高等部生が取り組む校外での体験においてもAさんの主張と共通する部分があるので、現状を少しお伝えします。まず施設・設備の面では、トイレが狭くて車椅子では入れなかったり、手すりが未設置だったり、2階の事業所であるにもかかわらずエレベーターがなかったり…、そのような事業所が散見されるなど、受け入れ環境のバリアフリー化は依然として大きな課題です。

一方で、就業体験・体験学習を重ねることで、事業所側から「これまで気付かなかった設備の問題点を知るきっかけになった」「今後どう改善すべきか見えてきた」という声をいただくこともあります。生徒たちの挑戦が、ただの「体験」に留まらず、地域の事業所や社会の意識を変える確かな一歩につながっています。

「声に出していくこと」が必要ですが、「話し合っていくこと」がとても大事なことです。声に出して発信することで現状を認識していただき、「どうすれば不便さを解消できるのか」を諦めずに話し合っていくことが大切だと実感しております。

